

『共生の文化研究』第 11 号刊行にあたって

多文化共生研究所 所長 杉山三郎

アメリカ合衆国のトランプ政権の誕生は、今後の世界の動きを予測するうえで、様々な示唆を与えてくれます。特に政治・経済面でのインパクトについては、世界中のメディアで議論されていることなので繰り返しません。人類学や文化研究の立場から意見を加えたいと思います。一言で言うなら、多様な文化の理解、平和共存を目指した多文化共生の道はまだ遠いと言うことでしょうか。国境を越えて交換・共有するモノ・情報量が急増し続けるグローバリゼーションの昨今、私達はお互いの心が接近し合い、共通の課題を共に議論できると考えていました。ところが、アメリカ優先主義を掲げたトランプ氏が大統領に就任し、他国や他文化に心を配ることより、まず自分たちの「かつての偉大なアメリカを取り戻そう」という幻想を掲げ、それを現実化しようと奔走しています。イギリスの EU 離脱と関連付け、ポピュリズムの台頭に拍車をかけ、自分のコミュニティー中心主義が、他国の政治にも飛び火しそうな今日です。深刻な問題は、メディアが報じるトランプ氏個人の問題ある言動や、現実にそぐいそうもない政策ではなく、アメリカ国民の約半数がトランプ氏を支持したと言う事実です。選挙活動の巧みさやロシア介入など様々な勝因は噂されていますが、たとえ勝者がクリントン氏に入れ替わっていたとしても、トランプ氏が共和党代表になった時点で、すでに憂慮すべきだったと言えるでしょう。私達の本源的な課題は、私たちの心にあるべき共生の心が問われている、揺らいでいることです。何がトランプ氏に、これだけの票を投じさせたのでしょうか。

ちなみに、このような自己中心主義はもちろんアメリカ、イギリスのみでなく日本人にもあると思います。最も顕著な例は、世界先進国で議論の的になっている難民問題を、日本政府は基本的に受け入れないと言う姿勢です。もちろん 99%以上が本来移民から成っているアメリカ合衆国と、長きにわたり単一民族だった日本とは難民、また移民問題を考える社会的土壌が違いますが、「自分を中心に」と言う思想は共通するものがあります。では人間とは、本性として自己中心的だったのでしょうか。

長い人類史的に見ると答えは否です。ヒトは 700 万年前に類人猿から別れ独自の道を歩んできましたが、樹上生活をしていた弱小集団が地上におりて何とか存続してきた方法は、家族・社会集団として結束し、様々な頭脳プレーを繰り返してきたからです。人類はより強い種がひしめく自然界において、人類史の 99%以上の長い間、他のメンバーのことを思いやり、狩猟採集活動で担当する分業の役割を果たしながら、たとえ個人は犠牲になっても集団として存続する道をずっと続けてきました。これはヒ

トとしての培われた「本性」であり、だからこそ自己犠牲の行為はどの民族でも見られ、また他人のために捧げた行動が感動を与え美談としてどの文化でも讃えられるのだと思います。また日本社会のように土地・資源が乏しくても、仲間意識の緻密な共同・分担作業による産業や経済活動が全体として功を奏するのも、個人主義ではなく、私たちの心に宿る「他を思う DNA」があるからでしょう。昨今のグローバリゼーション、自由貿易協定などは、相互の利益をお互い認め合って進めることが原則であり、それに対してトランプ氏の求める「(隣国はさておき)アメリカの繁栄を取り戻す」路線は、大げさな言い方ですが、長い人類進化史に対しての挑戦でもあり、いずれ修正を求められるべきだと言えるでしょう。きれいごととしてではなく、「他を思いやる心」は、それによりヒトは生物として生き残り、社会発展してきたからです。様々な価値観が交錯する現代の風潮のなか、多文化共生は単純な道のりではなく前途多難ですが、我々の認知能力を進化させて相互にメリット・デメリットを確認し、それも文化・民族の多様性の重要性を認識しながら、その具体的な共生の理論や戦略を発展させるべきだと思います。

世界中を騒がすトランプ政権誕生のおかげで大げさな話になりましたが、今後政権が存続するであろう4年間刺激を受けながらも、わが多文化共生研究所も相手を認め理解する共生の道を発展させ、微力ながら研究、教育活動を進めていきたいと思っています。

